

植民地の声

—朝鮮思想通信社刊『朝鮮及朝鮮民族』(1927)を中心に

鄭鍾賢(成均館大)

[訳=渡辺直紀]

1、伊藤韓堂と『朝鮮思想通信』

伊藤韓堂が発刊した『朝鮮思想通信』は、1925年に発行を始めて1943年彼が死んだ直後に廃刊になるまで、概略18年の間刊行された朝鮮文を翻訳した日本語新聞である¹。『毎日申報』は「朝鮮思想通信発行認可」の消息を次のように伝える。

朝鮮操觚界の重鎮で、かつて朝鮮新聞、京城日報等、諸社に健筆を揮い、多年間、毎日申報編輯部長を歴任する現・朝鮮語研究会主幹・伊藤韓堂氏を筆頭に、斯界有志が計劃出願中であった『朝鮮思想通信』は、四月二十六日附で新聞紙規則によって認可され、遠からず発行されることになった。この通信は朝鮮に関する各種思想研究を目的に、毎日発刊される朝鮮文の諸新聞をはじめ、其他雑誌、著述等で主要な部分を内地語に翻訳し、研究資料として有志に供給せんとするところにある。これはただ内地人のみならず朝鮮人にも思想上の進路の指針をさだめ、一面で自己を省察するに一大好資料となるだろう。発行所は京城府黄金町三丁目三十番地である²。

引用した記事は、『朝鮮思想通信』の目的を「朝鮮に関する各種思想研究を目的に、毎日発刊される朝鮮文の諸新聞をはじめ、其他雑誌、著述等で主要な部分を内地語に翻訳し、研究資料として有志に供給せんとするところ」にあると明らかにする。『朝鮮思想通信』の目的は、統治対象である朝鮮人の思想や動向、世論を抜粋・翻訳して、総督府の官辺や在朝鮮日本人社会の維持、ひいては日本内地人に提供するところにあつたといえる³。また、この新聞を通じた朝鮮に関する情報は、植民地統治のための帝国主義的な知識生産の側面も持っている⁴。このメディアは植民統治に役立ち、その功労で伊藤韓堂は施政25周年および30周年記念式で総督表彰を受けた。

だが、ここで『朝鮮思想通信』が、植民本国と被植民地の間に置かれている在朝鮮日本人のある種の存在論的位置を代弁しているという点を認識する必要がある。植民本国と被植民地の **Contact Zone** に

¹ 『毎日新報』は、1943年4月18日付の訃告「伊藤韓堂氏」を通じて、彼の簡略な生涯を要約して伝えている。伊藤韓堂の死後10日後である4月28日、『朝鮮通信』も廃刊となった。

² 「朝鮮思想通信発行認可」『毎日申報』1926年4月28日。

³ チョン・ジンソクの『言論朝鮮総督府』(コミュニケーションブックス、2005、154頁)によれば、『朝鮮思想通信』記者はキム・スジン、趙岡熙、李完應、イ・ジョンソプ、ソ・ネソプと、日本人オガワ・シュウゾウ、シバ・ガクマなどであった。趙岡熙は東亜日報記者、時代日報社会部長を歴任した人物である。東京支局にはパク・サンヒが勤めていた。パク・サンヒは毎日新報と京城日報に勤めた人である。

⁴ 後に見る『朝鮮及朝鮮民族』の「朝鮮各地の風俗の内から」は、朝鮮各地方の風俗を挿絵とともに構成し、朝鮮の民俗を概観して、エキゾチックな風物に対する好奇心と、朝鮮人の習俗に対する知識構成という2つの側面をともに示している

位置した在朝鮮日本人は、朝鮮という場所を新たなアイデンティティの基盤として、植民地社会との接触の中で、本国の「日本人」とは微妙に異なる文化的・政治的立場を形成することになる。この新聞を創刊した伊藤韓堂の場合も、このような植民移住者の形状を示す。彼の実名は伊藤卯三郎で、名前を「韓堂」とするほど朝鮮に愛着を示し、朝鮮で世を去った。福岡出身である彼は、1905年5月に朝鮮に渡り、いちはやくハングルを習得し、鎮南浦新報社、朝鮮新聞社、京城日報、毎日新報など、有力日本人新聞を経て、ハングル新聞の編集を担当した。1924年7月、毎日申報社編集部長を辞し、1926年4月に朝鮮思想通信社を創立した。ハングル版編集の責任をになうほど優れた朝鮮語の実力を持ち⁵、在朝鮮日本人の朝鮮語学習書、警察官の朝鮮語試験など、制度圏内における朝鮮語普及と教育の権威者として位置し、草創期の朝鮮語研究にも重要な役割を果たした⁶。

朝鮮語に習熟し、朝鮮を根拠地として生活した在朝鮮日本人である伊藤韓堂は、植民者と被植民者の調和ある共存をモットーとする「内鮮融和」というイデオロギーに共鳴し、被統治者である朝鮮人の声に耳を傾けるべきと考えた。後に見るが、彼は朝鮮人側の意見を聞かない、いわゆる「内地人」側を批判する。彼らと異なり、自らは朝鮮人の胸の内をのぞいて、彼らの意見(声)に耳を傾けようとする目的で『朝鮮思想通信』を創刊したと明らかにする⁷。18年間刊行されたこの新聞全体の資料を把握し、時期によってその変化の様相を検討するのは、多くの時間を要するので、後の課題として先送りしたい。今回の発表では、『朝鮮思想通信』の脈絡を圧縮的に示す、創社1周年記念論文集である『朝鮮及朝鮮民族』第1集(1927)を中心に、伊藤韓堂が目した「植民地の声」とそのなかで当局が禁止した特別な声は何であり、この論集に寄稿した朝鮮知識人の日本語エクリチュールの欲望などについて簡単に検討したい。

2、『朝鮮及朝鮮民族』に見られる「朝鮮の声」

『朝鮮及朝鮮民族』は1927年8月に刊行された著書で、韓国の学界ではここに掲載されている崔南善の「不咸文化論」や、李能和の「天道教と朝鮮」など、各学問分野と関連した論文に注目し、タイトルだけ引用されてきた著作である。「凡例」によれば、朝鮮思想通信社の創立1周年を記念して発行され、春と秋2回出版される計画だったが、1集を最後にこれ以上発刊されることはなかった。伊藤韓堂は冒頭の「本書の刊行について」を通じて、この著述の刊行の意味を明らかにしている。

⁵ 『毎日新報』1940年1月21日付3面6段に興味深い記事を伝えている。京城放送局第2放送局で「内地人として朝鮮に長く住んで朝鮮語が堪能な方4、5人を集め、数十年前の朝鮮の教育、風俗、交通、産業などを今日と比較し」「朝鮮の今昔」を語る座談を用意したということである。その参席者として、通訳官・田中徳太郎、通訳官・西村真太郎、朝鮮通信社・伊藤韓堂、本部嘱託・中村健太郎などであると明らかにしている。伊藤韓堂などの朝鮮語の実力を想像させる記事である。

⁶ 一石・李熙昇の回顧によれば、朝鮮語学会は「朝鮮語研究会」から出発し、当時、伊藤韓堂が同じ名称の「朝鮮語研究会」を作って太平路に事務所を置き、日本人を相手にハングルを教え、月刊雑誌『朝鮮語研究』を刊行していたので、会の名称を「朝鮮語学会」にしたという。(『一石・李熙昇全集』2、ソウル大学校出版部、2007、488頁。)

⁷ 特に『朝鮮思想通信』の草創期には、朝鮮人の「胸の内」をのぞくために検閲以前の原稿を翻訳・紹介したという側面でも、この新聞は検閲研究、植民地研究の貴重な資料として活用される可能性を確保している。

内鮮人の融合は双方がよく理解して合わせることから始まり、敵を知らずして戦争をしようとする無謀さでは到底容認できない。万歳騒擾以来、内地人側においては朝鮮統治に関するさまざまな議論が発表され、多くの書籍が出版されたが、不思議にも最も重要な朝鮮人側の意見と批評を取ろうとする者がない。朝鮮を研究した内地人有志の意見は言うまでもなく尊重すべきだが、朝鮮人自身の朝鮮研究——特に日本人の朝鮮統治に対する被治者としての朝鮮人の声は、大きく耳を傾けるべきであろう。そうして私が主宰する『朝鮮思想通信』ができたのである。それによって若干でも朝鮮同胞の喜びや悲しみ、怒りを推測することが可能になったとすれば、その喜怒哀楽を知っているだけでも朝鮮人は知己の感情を抱くことになるだろう。本書は朝鮮人士の筆による論文集である。まったく学術研究に属するものもある。時事に関する評論もある。近ごろの新運動の傾向を記述したものもある。内地人に対する不平不満を吐露したものもある。要するに『朝鮮思想通信』の延長であり、それによって「朝鮮人の朝鮮」がどのようなものかを知ることになれば、編者である私としては幸運なことこのうえない⁸。

伊藤韓堂は、自身が主宰する『朝鮮思想通信』が朝鮮人側の意見と批評を取り、声を聞くためにでき、その結果として朝鮮人の「喜怒哀楽」を聞き入れるだけでも、朝鮮人から知己の感情を得ることになったと自評する。伊藤韓堂は日本人が朝鮮人の声を聞こうとしない態度に対して批判し、その声に耳を傾けるために自らの通信社ができたと明かす。植民地／帝国の不均等な権力関係において、植民地人の「声」は日本語を媒介にしなければ帝国に聞こえない。朝鮮語を聞き、話すことができ、植民者である日本人ではあるが、植民地社会の接触地帯にある「在朝鮮日本人」という特殊な中間子の位置を拠点として、伊藤韓堂は朝鮮人の声を内地人側に伝える役割を自認する。

ならば、伊藤韓堂が伝えようと思った「朝鮮の声」の実体はどのようなものだったか。つまり、伊藤韓堂（あるいは朝鮮思想通信社）が考える、意味があると判断する「朝鮮人の声」を、本書に掲載されている具体的な目次を通じて概括してみよう。

連番	タイトル	筆者	プロフィール
1	題字 ‘朝鮮及朝鮮民族’	吳世昌	
2	不成文化論	崔南善	
3	朝鮮民族思想變遷の概要	李覺鍾	雑誌『新民』社長
4	朝鮮民衆運動の過去及現在	趙奎洙	朝鮮日報記者
5	黨争と朝鮮人	洪承燾	朝鮮思想通信社囑託
6	我がハングル(諺文)の世界文字上の地位	崔鉉培	延喜専門學校教授
7	繼子根性と朝鮮人の心境	閔泰瑗	中外日報編輯局長
8	西北地方の朝鮮人の特質	朴尙信	朝鮮思想通信社東京特派員
9	濫突文化傳播考	孫晉泰	

⁸ 伊藤韓堂「本書の刊行について」『朝鮮及朝鮮民族』第1集、朝鮮思想通信社、1927.8。(和訳は韓国語からのもの一訳者)

10	朝鮮民族政治運動の一般的趨勢(削除)	李灌鎔	『現代評論』主幹
11	我々の白紙はどうする	柳一宣	
12	朝鮮の思想善導と言論	金丸	国民協會相談役・時事評論主幹
13	朝鮮の學政當局はなぜ朝鮮語を度外視するか	李完應	朝鮮語研究會長
14	此の差別待遇を奈何	徐椿	東亞日報政治部長
15	朝鮮時文の變遷	鄭萬朝	京城帝國大學講師
16	天道教と朝鮮	李敦化	開闢社理事
17	世界の趨勢と朝鮮の將來(삭제)	宋鎮禹	東亞日報主筆
18	朝鮮衡平運動の概観	朝鮮衡平社本部	
19	朝鮮女性運動の過去・現在及將來	黃信德(女史)	前中外日報記者
20	朝鮮過去の回顧	李允熙	京城第一高普教諭
21	吾人をして少しく語らしめよ	安在鴻	朝鮮日報主筆
22	内鮮一體論について	鮮于[金筍]	大東同志會長
23	朝鮮青年の求むる將來の基督教	洪秉璇	朝鮮基督教青年會聯合會幹事
24	無窮花考	禹浩翊	崇實專門學校教授
25	意志の人・實行の人李圭完	趙岡熙	朝鮮思想通信記者
26	今後の朝鮮耶蘇教會	梁柱三	朝鮮南監理教傳道局總務 牧師
27	佛教渡來前の朝鮮と渡來後の朝鮮	權相老	雑誌『佛教』主筆
28	危機に瀕せる朝鮮教育界	柳一宣	
29	本誌寄稿家諸氏略曆		
30	附録-朝鮮各地の風俗の内から-(東亞日報社懸賞募集)	柳完熙(訳)	

筆者の面々は、本書の企画者が1920年代の朝鮮社会の地形を把握する方式を示す。仏教、天道教、キリスト教など、当代の朝鮮社会に重要な影響を及ぼした各宗教界の核心的な筆者である權相老、李敦化、梁柱三などの論文が載っている。言論および思想の側面では、東亜、朝鮮の二大新聞の主筆である安在鴻と宋鎮禹、20年代の重要雑誌である『現代評論』主筆・李灌鎔などの論文が載っている。彼らは1920年代以後の研政会の自治論と非妥協的民族主義、また民族協同戦線である新幹会運動などを代表する人物でもある。ここに、その後、代表的な「親日派」として議論される大東同志会の鮮于[金筍]、同民会の理事である柳一宣、国民協会の金丸などが含まれている⁹。つまり、伊藤韓堂(あるいは企画者)は、早い時期に「内鮮一體論」を展開して参政権運動を展開する内地延長論者から、文化統治の限度の中で実力を養成して自治論に進む研政会(宋鎮禹)、非妥協的な民族主義者である安在鴻、新幹会幹事・李灌鎔に至るまで、政治的に多様な朝鮮の声を、もれなく伝えようとしたようである。

だが、伊藤が伝えようとした朝鮮人の声は、検閲によって全文削除や××字の伏せ字で織りなされた声のテキストとして出版された。まず、ハワイの汎太平洋民族会議に参加して戻り、東亜日報に連載した

⁹ 鮮于[金筍]と柳一宣は、上海で発行された『独立新聞』1920年2月5日付で、李完用、宋秉璇、閔元植などとともに処断すべき「売国賊」で名を上げている当代の大家「親日派」の一人である。

宋鎮禹の「世界の大勢と朝鮮の将来」¹⁰が全文削除された¹¹。次に李灌鎔の「朝鮮民族政治運動の一般的傾向」も全文削除された。李灌鎔はいわゆる「丁未七賊」といわれる子爵・李載崑の息子でありながら、社会運動に参加して『現代評論』主筆や新幹会の幹事として活動した。『現代評論』は、非妥協的な民族主義者および社会主義知識人系列がともに参加した朝鮮事情研究会の機関誌と見なされた雑誌である。李灌鎔の思想的傾向は論議の余地があるが、本書の関係者たちは彼を社会主義者と規定している¹²。安在鴻の論文も全体の半分以上にあたる「朝鮮人と国語問題」という章が全文削除された。その他にも、凡例では閔泰瑗、趙奎洙の論文などが十数行削除されたと書かれている。目次で確認でき凡例で明らかにした他にも、本書をよく読んでみれば、多くの論文が検閲によって部分削除されたことを確認することができる¹³。

このような検閲の結果によって、伊藤が伝えようとした多様な「朝鮮人の声」は削除され、不具化して、一つの形の声だけが完全な形で伝えられる。それは国民協会、同民会などの積極的な体制協力団体が主張する「内鮮融和」あるいは「内鮮一体」の声である。たとえば、「内鮮人があたかもイングランドとアイルランド、あるいはウェールズとともに互いに一つの塊になって、大陸方面で発展して世界的に雄飛する方法は、朝鮮を独立させて、いわゆる三千里山川と 2 千万の人口で出て行くより、日本と一つになって、広い面積と 7 千万の人口で出て行く方法が確かに有利だろう」¹⁴と主張する鮮于[金筍]の「内鮮一体論について」は、微塵の削除もなく自らの声をそのまま発話する。検閲を通じて、『朝鮮及朝鮮民族』では、朝鮮の政治的現在や未来と関連しては、「内鮮融和」や「内鮮一体」を自発的に要求する政治勢力の声だけが完全な形で伝えられた。もしかしたら、伊藤は、当初からこの系列の朝鮮人の声を浮上させて聞かせたかったのかもしれない。たとえば、この企画の主催側である朝鮮思想通信社の記者である趙岡熙が書いた「意志の人・実行の人李圭完」はその証拠である。日本人たちに朝鮮人も怠惰な人間ばかりでなく、優秀な資質を持った民族であることを言明し、甲申政変の主役で、以降、植民地で江原道知事、咸鏡南道知事、東洋拓殖株式会社の顧問を歴任した李圭完のエピソードを通じて、望ましい朝鮮人像を提示している。李圭完は植民地化と総督政治を称賛し参政権の獲得を期待した人物である。

¹⁰ 宋鎮禹「世界の大勢と朝鮮の将来」『東亜日報』1925.8.28.-9.6(総 15 回)

¹¹ 興味深いのは、1925 年、東亜日報掲載当時には、このような全面削除の検閲はなかったという点である。おそらくこのような現象は、朝鮮総督府図書課の検閲機構が定着・強化されていく過程と関連するだろうが、朝鮮人に許される民族主義の論説が日本人読者には禁止される奇妙な矛盾が発生している。日本から朝鮮に移動するテキストの翻訳過程に作動する検閲に対する考えは自然と想起できるが、逆に植民地で生産されたテキストが本国側に移動する時の検閲に対しては注意を注げないようである。植民地／帝国の不均衡な権力と文化的力量のためだろうが、『朝鮮及朝鮮民族』のような内地の日本語読者を想定した書籍で、植民地と同じ基準が作動するのは興味深い。検閲が、それを読む読者と関係なく、検閲が成り立つ法域における基準によっておこなわれた証拠ではないだろうかと考えられる。

¹² 李灌鎔のプロフィールは次の通りである。「氏は明治 23 年生まれで、李王家の近親子爵・李載崑を父として持つ人物である。明治 41 年、東京府立第 4 中学校卒業、大正 2 年、京城専修学校を卒業して英国に渡り、オックスフォード大学政治科を卒業して、フランス、スイス、ドイツの 3 か国で 6、7 年間、哲学を専攻し、ドイツで「意志論」に関する論文で哲学博士の学位を得て、大正 11 年帰国、延禧専門学校教授、大正 14 年に時代日報副社長になったが、今は雑誌『現代評論』の主幹として筆陣を拓げるほか、新幹会およびその他の社会主義団体にも名を上げている」(371 頁)。

¹³ これらの中で、ハンブルグ新聞・雑誌に発表されてから、本書に翻訳されて収録され検閲された論文は、ハンブルグ版と日本語版、そして解放後の本来の全体原稿の再出版分をみな交差・対照すれば、当代の検閲の基準と具体的な適用についての資料として活用できるだろう。

¹⁴ 鮮于[金筍]「内鮮一体論について」前掲書、208 頁。

編集の主体である朝鮮思想通信社側で、このような李圭完の人となりや、官僚であり東拓顧問としての有能さを強調する自社の記者の記事を入れたことは、本書において、より重点を置いて伝えようとする朝鮮人の声の実体を暗示する。朝鮮という具体的な場所を中心に、自らの社会的アイデンティティを再構成しなければならない在朝鮮日本人と、植民地化を元に戻すことができない現実として認識した自治論者（あるいは内地延長主義者）の間の共通する政治的な立場が、朝鮮思想通信の発信する「朝鮮の声」だったといえるのである。

3、日本語エクリチュールを通じた「朝鮮」の主体化

ならば、朝鮮人側では、この誌面になぜ論文を載せたのだろうか？ まずは伊藤韓堂とのネットワークと通信社側の交渉などを念頭に置くことができるが、その詳細な事情は確認できない。事実、植民地当局に対する不平や批判、要求などは、朝鮮社会のジャーナリズムでも行われていた。だが、朝鮮人の立場から、自分たちの声を日本の読者に直接伝えられる誌面に会うことは容易ではなかった。朝鮮思想通信社の企画は、朝鮮知識人の立場からは、日本人に「朝鮮(人)」を理解させ、多様な要求、批判など展開できる機会だったのであろう¹⁵。

学術論文は日本人に対する直接的な要求と関係ない領域のように思われるが、事実、どの論文よりも日本人読者を意識していることが確認できる。ここで『朝鮮及朝鮮民族』の巻頭論文格である崔南善の「不咸文化論」に注目したい。1925年12月に作成され本書の冒頭に発表されたこの長文の学術論文は、「東洋学の真の建設は、朝鮮を中心にして、朝鮮の秘密の過去のドアが開くことを待ってはじめて始まる」と主張することで始まる。崔南善はこの論文を通じて、檀君以降の朝鮮民族の単一性に言及し、中国と同等、あるいは優れた東夷文化を設定し、特に朝鮮と日本を含む「不咸文化圏」を提示する。崔南善は檀君を特殊な共同体の起源として設定しながら、同時に文化圏の議論を通じて複数の世界文化圏の中心に構成する。このような議論の構造が、中国文化を他者化しながら、新たに「東洋」という地政学的な圏域を創案した、東洋史学の言説の枠組みを意識しているという点は強調される必要がある。特に彼は、日本の東洋史学者の檀君神話に対する批判的見解に反論して、近代学問の多様な方法論を動員し、日本の東洋史学が創り出した「東洋」に匹敵する、東方文化圏の方法的拠点として提示している。不咸文化論は檀君民族主義だけを主に主張しようとするものではなく、朝鮮を主導者とする東方文化圏という広域の文明圏を言説的に構成しようとする試みである。崔南善は帝国の学術アカデミズムを強く意識して、彼らが構築する「東洋史」に「檀君」を媒介として介入し、それを変形させようと試みた。彼がこの研究を執筆する時に意識した直接的な読者は、おそらく帝国の「東洋史」アカデミズムであり、この論文を通じて帝国の学術にかかわることを望んだのだろう。帝国の学術に自らを証明し、朝鮮を記入する作業は、朝鮮語では不可能なことだったが、そのことが、もしかしたら解放後の全集作業を通じて韓国語に翻訳される時まで、崔南善がこの論文を朝鮮語で発表しなかった理由かもしれない。

¹⁵ たとえば、李完應の「朝鮮の学政当局はなぜ朝鮮語を度外視するか」は、必修科目である朝鮮語科を学校で疎かにすると批判し、朝鮮語教科書の内容の不良に対して、総督府学務局に対する暗黙的な批判を吐露している。

禹浩翊の「無窮花考」もやはり同じ脈絡で理解できる論文である。この論文は、まず無窮花のさまざまな異称と文学上、医学上、植物学上にみられる無窮花などを説明する。つづいて中国の古代漢籍が無窮花を「君子国の花」と命名したことに対して、その君子国を日本と主張する日本人学者の学説を、文献学的考証を通じてひとつひとつ反論し、「君子国」を朝鮮であると実証する。文学、医学、植物学に関する近代学術の方法を適用し、文献考証学を通じて「朝鮮」という主体性を表象する「無窮花」論を構成するこの論文も、やはり日本語の学術に対して強く意識して潜在的読者として日本人学者を想定している¹⁶。

崔南善と禹浩翊の論文は、朝鮮の主体性を構成しようとする朝鮮研究家の日本人の日本語学術を強く意識して形成され、日本語エクリチュールと近代学問の形式を通じて、日本の学術界に自らを刻印させ、「朝鮮」を拠点として帝国が構成した言説の体系を変化させようとする、強い主体化の欲望を示した事例であるといえる。1920年代の朝鮮知識人の日本語学術エクリチュールの様相を検討しながら、植民地末期、崔載瑞が主管した『国民文学』が想起される。崔載瑞の『国民文学』と同様に、「内地」に「朝鮮」という特殊性を刻印させ接続させることによって、新たな「国民文学」、すなわち帝国の文学全体を変形させるために、「日本語」で発信された「朝鮮の声」だったのではないだろうか？ 1920年代の「朝鮮の声」が、温情的で恩恵授与的な在朝鮮日本人の媒介によって伝えられたとすれば、新しい世代はそのような媒介なしに、「内地」に「朝鮮の声」を発信しようと考えたのではないだろうか。(未完)

¹⁶ この論文は『朝鮮及朝鮮民族』を通じて日本語で全体原稿がまず発表され、1927年『東光』13、15号に「無窮花考」(上)(中)が発表されてから、再びその残りの部分が1928年『青年』6、7号に「無窮花礼賛」として発表される。